

15. 公立施設と連携した自立促進プログラム開発事業② 事業報告書

1 事業の必要性

視覚に障害のある子供たちが社会においてよりよく自己実現を図るためには、自然とふれあい、仲間とともに生活し、多くの人との交流をとおしてコミュニケーション能力を高めていくことが重要である。また、同じ障害のある人との出会いをとおして障害を受容・認識したり、人間関係づくりの基盤となる自他に対する信頼感や自尊感情を高めたりすることも重要である。本事業では視覚に障害のある子供たちを対象に、たくましく、心豊かに生きていく力を培うために体験活動の場と機会を提供し、様々な体験をとおして、前述した能力を高めていくものである。

2 趣 旨

視覚に障害のある子供たちが自然とふれあい、仲間とともに生活し、多くの人との交流をとおして自主性やコミュニケーション能力といった社会性を育み、人間関係づくりの基盤となる自他に対する信頼感や自尊感情の向上を図る。また、夜須高原青少年自然の家（標高約400m）の立地条件を生かし、冬の夜須高原の魅力を生かしたプログラムを実施する。

3 事業の特色

福岡県立少年自然の家「玄海の家」はこれまで県の事業として「視覚障害」の児童・生徒を対象に事業を実施してきているが、事業の更なる充実を図るため、当施設と連携・協力し、事業の推進を図る。

- ①福岡県立少年自然の家「玄海の家」と連携・協力し、効果的な活動プログラム等を活用することで事業のさらなる充実を図る。
- ②国立夜須高原青少年自然の家の立地条件（標高約400m）を生かし、冬の夜須高原の魅力を生かしたプログラムを実施する。
- ③福岡教育大学特別支援教育課程視覚障害教育研究室の学生ボランティアを活用し、子供たちの生活や活動を支援することで、人間関係づくりを促進する。
- ④餅つき体験を通して、仲間と協力して自分で昼食をつくりあげる喜びを体感させる。

4 期 間

平成29年1月21日（土）～平成29年1月22日（日） 1泊2日

5 対 象

視覚に障害があり、宿泊・自然体験活動が可能な小中学生及び高校生等 10名

6 企画・運営のポイント

- ① 事前打ち合わせを綿密に行い、児童生徒への直接指導や送迎の手配、物品の準備など両施設の役割分担を明確にするとともに、各活動プログラムの目的とねらいを明らかにし、共通認識する。
- ② 子供への関わり方（参加する児童生徒の実態や配慮すること）については職員間だけでなく、学生ボランティアとも共通認識できるように事前打ち合わせを行い、ねらいに基づいて一貫した支援体制を確立する。

プログラム・日程

1 月 21 日					11:00	11:20	12:30	13:30	16:30	17:10	17:30	18:30	20:00	21:00	21:30
					受付 (夜須高原 青少年の 家)	ランチ ミーティング (持参弁当)	はじめの つどい (保護者 懇親会)	ゴールボール 体験	休憩	タベの つどい	夕食	レクリエーション	入浴	ふり かえり	就寝
1 月 22 日	6:30	7:20	8:00	9:30					12:00	13:00					
	起床	朝の つどい	朝食	餅つき体験	昼食					終わりの つどい (夜須高原 青少年の 家)					

活動の様子



スポーツ体験（ゴールボール）



学生ボランティア企画のレクリエーション



餅つき体験



参加者によるギターライブ

6 成果

- ・「保護者同士がつながりを強めること」「保護者に事業への理解を深めてもらうこと」を目標として、保護者が参加する懇親会を設定したことで、保護者同士で助言し合う姿が見られたり、事業の広報の仕方についてのアイデアを提供してもらったりと活発な意見交流をすることができた。
- ・ゴールボール協会所属の講師の指導の下、参加者が学生ボランティアや職員と一緒にゴールボールを楽しむことができた。参加者は、チャレンジする気持ちや、失敗を恐れない気持ちをもってゴールボールに取り組むことができた。3対3の試合を行った際には、仲間と作戦を立てたり、得点を決めたときは歓声をあげて喜んだりする姿が見られ、参加者にとって高い満足度を得たプログラムとなった。
- ・「参加者の絆を深めること」「みんなで楽しい時間を一緒に過ごすこと」を目的として、学生主催によるレクリエーションを行った。ペットボトルや音のなるボールを使ってボーリングを行った。倒したペットボトルの数を聞いて喜んだり、うまく倒れるように声を掛け合ったりして、仲間や学生ボランティアと仲良く活動する姿が見られた。
- ・学生ボランティアと一緒に、道具の準備から片付けまで、餅つきの行程を体験することができた。杵や臼の形を、実際に触りながら知ることができた。参加者と学生ボランティアが声を掛け合い、タイミングを合わせて餅をつく姿が見られた。
- ・福岡県立少年自然の家「玄海の家」と国立夜須高原青少年自然の家の連携を密にし、研修室の利用や食堂の座席、入浴時間の設定等を調整し、活動をスムーズに進めることができた。
- ・11名の学生ボランティアが参加したことで、ボランティアと参加者がマンツーマンで活動することができた。学生ボランティアと、参加者との交流も密になり、より良い関係を築くことができた。

7 課題

- ・新規の参加者を増やすため、弱視学級などへの広報の強化や、リピーターに参加を勧める声かけをお願いすることが必要である。
- ・安全面の配慮を行うには、学生ボランティアの確保が必要である。入浴等の支援の際には、学生ボランティアやスタッフと参加者の男女比を考慮する必要がある。
- ・前日が雪だった為、野外での活動が制限された。国立夜須高原青少年自然の家の立地条件を生かし、冬の夜須高原の魅力を生かしたプログラムを実施する為に、荒天時においても視覚に障害のある子供たちが自然とふれあうことができるプログラムの開発が必要である。